公園を活用した住民主体のコミュニティプラットフォーム

—川崎市宮前区を対象地とした「まちかどマルシェ」の実践—

主査　辻　麻里子*1
委員　渡邉　秀樹*2，藤牧　功太郎*3

「公園をコミュティプラットフォームでコミュニティ再生の拠点に」
大都市郊外のベッドタウンの典型的地域である川崎市宮前区において，公園等の公共空間で，住民主体のコミュニティプラットフォームによる「まちかどマルシェ」を展開した。活動の狙いは，公園の新たな活用方法を見出し，地域活動団体の活性化，社会的包摂力を醸成することである。公共空間で８回のまちかどマルシェやまちかどライブラリーを行った。参加者相互の交流，プラットフォーム主体の拡充，行政等他セクターとの連携など一定の成果を得ることにより，公園が人々の「つながる」ニーズを実現する社会的ハブになる可能性を見出した。本実践活動は，郊外住宅地の重要課題であるコミュニティ再生の方法を模索するためのケーススタディである。

キーワード：１）郊外住宅地，２）コミュニティ再生，３）公共空間，４）マルシェ，５）マイクロ・ライブラリー，６）社会的包摂，７）コミュニティプラットフォーム，８）公園の活用，９）住民主体，１０）新たな公共性

COMMUNITY REVITALIZATION BY A COMMUNITY PLATFORM USING PARKS

-*Machikado* marche initiative in Miyamae-ku, Kawasaki City-

Ch. Mariko Tsuji
Mem. Hideki Watanabe, Kotaro Fujimaki,

Making parks a hub for community revitalization through community platform initiative

With the extension of railways, many bed towns had been built along the railroad. In one such area, Miyamae-ku in Kawasaki City, the *Machikado* Marche (community market) was done eight times by a resident community platform in public spaces, mainly a park. The aim is to verify a new innovative way of park use to activate community groups and lead to a more inclusive community. We have acknowledged raised communication levels among participants, increased actor participation, collaboration with other sectors. We saw a possibility of a park becoming a social hub that unites various needs of various people.

1.　実践活動の背景と目的

1.1　郊外住宅地の現状と課題

高度成長期以降の急激な人口増加の受け皿として，鉄道の延伸と共に都心に通う人々のベッドタウンとして広がった大都市圏郊外部では，近年，団塊の世代を核にした高齢化の急速な進展，単独世帯の増大（本実践活動対象地の川崎市は，全世帯に対する単独世帯の比率はほぼ43%（2015 年）[文1)]，また，女性の社会進出に伴う幼児，小学生の待機児童数の増加など，地域との関わりやケアを必要とする人々が急増している。それに伴い，従来の自動車に依存した暮らしから，徒歩圏内に生活利便拠点を必要とするライフスタイルへと，住生活に大きな変革が起こり始めている。

郊外住宅地はまた，分譲・賃貸マンションなどの集合住宅居住者が多く，今後さらに増加すると予測される。内閣府の「国民生活白書（平成 19 年版）」[文2)]は，単身世帯の人は隣近所との行き来や町会，自治会への参加が他の世帯より低いこと。また，地域から孤立している人は借家集合住宅に多いことを明らかにしている。集合住宅居住は，住まいが近接しているようでいて，実は反対に社会的孤立に陥りやすい住環境である。地域から孤立しがちな単身者世帯の増加と相まって，こうした人々の孤立を防ぎ，社会的包摂力の高いコミュニティづくりが求められる。

地域のコミュニティ活動の現状は，町内会等の地縁型組織も，子育てや高齢者支援などのテーマ型市民活動も，ともにメンバーの高齢化や固定化による担い手不足，活動場所や資金の不足，情報発信力の弱さなどから，その

*1宮前まち倶楽部代表　工学修士　*2有限会社リノベイトダブリュ代表取締役　工学修士　*3新宿区役所　工学修士

継続が危ぶまれている。もとより，旧住民中心の地縁組織と新住民の多いテーマ型組織の連携の難しさも，郊外部の地域コミュニティの大きな課題とされてきた。

一方，厳しい財政状況下にある行政は，公共施設の老朽化による建替えや，公園や街路空間などの維持更新の負担が課題となっており，民間との協働による管理運営が模索されている。例えば，本実践の対象地である川崎市では，「街区公園等の管理運営に関する要綱」(2006 年制定）のなかで，「管理運営協議会」の制度を設け，公園利用に係わる規制緩和を推進し，地域コミュニティの核としての公園の利活用を図るとともに，市民との協働による管理運営を進めるとしている。

今日，歩いていける日常生活圏内で，誰もが助け合えるような地域のコミュニティケアやまちづくり活動活性化の仕組み作りが喫緊の課題となっている。この解決には，社会的包摂力が醸成されるよう，コミュニティづくりとその活動基盤を形成することが必要であり，その方法論の構築が求められている。

1.2　コミュニティプラットフォームについて

人びとの社会関係の一側面として「自助，共助，公助」と分類される中で，コミュニティは「共助」を対象とする概念である。それは，一定の共通の基盤を共有する集合体である。例えば，地域社会，仕事などの職域，環境問題など社会的共通課題，ＳＮＳ等の情報空間などである。国領（2016）[文3)]は，プラットフォームという概念は，当初は基本ソフトなどＩＴ業界のビジネスモデルであったが，次第にＳＮＳなどの交流サイト，中でも，地域社会などで多様なプレーヤーをつなぐ基盤としての重要性が高まっていると指摘している。

コミュニティプラットフォームは，総務省の「新しいコミュニティのあり方に関する研究会」(2008）[文4)]で提起されている。その背景には，従来の町会の衰退とともに市民活動の胎動がある。地域社会において，これらの各プレーヤーが協働して地域課題に対処することが重要であり，政策的なテコ入れが必要である。これらは，市民センターの運営協議会，地区協議会，また，中間支援組織としてのまちづくりセンターなどにみられるようなコミュニティプラットフォームが形成され一定の成果をあげている。

これらが，自治体の全域若しくは出張所，学校区を範囲とし，行政が主導して設立しているのに対して，本実践活動は，街区公園の利用圏域という小地域において，従来の行政主導とは異なる住民の自発的なコミュニティプラットフォームを形成するものである。また，活動を可視化できる公園等の身近な公共空間を活用することの有効性も提言し，検証するものである。

1.3　実践活動の目的と目標

本実践活動では以下の①②③を検証する。

①コミュニティプラットフォームの効果を明らかにする。

本実践活動は，「コミュニティプラットフォーム」を構築し，マルシェを開催することを企図している。プラットフォームメンバーには，宮前区内で様々なテーマで多様な活動をしている団体等がなり，協力してマルシェを開催，また出展・出店する。

マルシェ参加団体は，マルシェの準備から開催を通じて，相互にメンバーや活動内容を知り，情報交換をすることができる。さらに，一つのイベントを作り上げていくなかで，信頼も醸成される。それにより，連鎖鎖的に協働や新しい活動が生まれ展開されていくのではないかと期待される。本実践活動を通じて，実際に新たな発意が生まれ，活動の多様性が得られるのかを把握し，コミュニティプラットフォームの意義を考察する。

②公園を利用することの意義を把握する。

市街地において，公園は，緑やゆとりなど都市の自然環境の側面が重要視されてきた。本実践活動は，誰でもが利用できる，どこにでもある身近な公園で「マルシェ」を行うことで，公園に地域のなかの社会関係形成のハブとなる可能性があることを検証するものである。出展・出店者の活動を公園というオープンな空間で可視化することで，行政を含めた地域の様々なプレーヤーとの新たな関係性や連携が生まれるのか，また，マルシェに足を運んだ住民が参加団体の活動を見ることで，受動的から能動的な参加への動機づけが図られる可能性があるのか，住民同士の交流や出店者との新たな関係性にも繋がるのかなどに着眼して把握する。

また，「公園」で行うことの意義や効果を，駅前広場でもマルシェを行い，それとの比較を通じて公園活用の意義を明らかにしていく。

③水平展開に向けた機運の把握と課題の整理

本実践活動は，「マルシェ」という，日頃の活動や手作り作品など，費用や労力の面でさほど負担のかからない取組に重点をおいており，それが身近な，どこにでもある公共空間である「公園」で行われることで多くの人に可視化され，「自分もできるのではないか」という参加の動機づけが図られることが期待される。郊外住宅地が直面しているコミュニティの再生の方法論として有望な，ひとつのモデルケースとして，今後の普及と持続的な展開を企図している。本実践活動では，同様の活動の萌芽等が見られるかなどを把握する。

2.　実践活動の対象地と主体，経緯

2.1　対象地の川崎市宮前区について

川崎市は，神奈川県の北東部に位置し，多摩川を挟んで東京都と隣接し，横浜市と東京都に挟まれた，細長い

地形を市域としている。面積は 144.35km²で，市内を縦断する形で JR 南武線が通り，南武線と交差する形で 5 つの私鉄が横断。海側から京急線，東急東横線，東急田園都市線，小田急線，京王相模原線が走っている。また，川崎市は人口約 150 万人の政令指定都市として，川崎港側から川崎区，幸区，中原区，高津区，宮前区，多摩区，麻生区の 7 つの区がある。

宮前区（人口約 23 万人）は，市内 7 区の中で最も昼夜人口比率が低く，通勤通学で区外に出て，日中を地元で過ごさず，日常的な交友関係等も区外に持っている人が非常に多い地域である。換言すれば，地元への愛着を持ちにくい住民が数多く暮らすベッドタウンだと言える。宮前区の昼夜間人口比率は男女合計 73.4%（2015）で，日本全国の市町村の中でも第 9 位の低さである[文5)]。また，人口は増え続けているものの，転出入が多く，5 年前と現在の住所地が異なる移動人口比率が，特に鉄道沿線で 30～35%以上と高い（図 2-1）[文6)]。

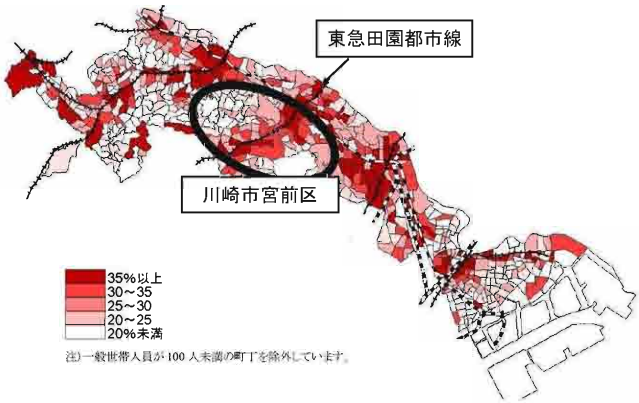

図 2-1 居住歴 5 年未満の人口割合

マンションなどの共同住宅世帯は区内全世帯のほぼ 7 割であり[5)]，前述した近隣関係を築くことが難しい条件の一つである住まい方が際立っている。これもまた鉄道沿線地域で際立って多い（図 2-2）[文6)]。

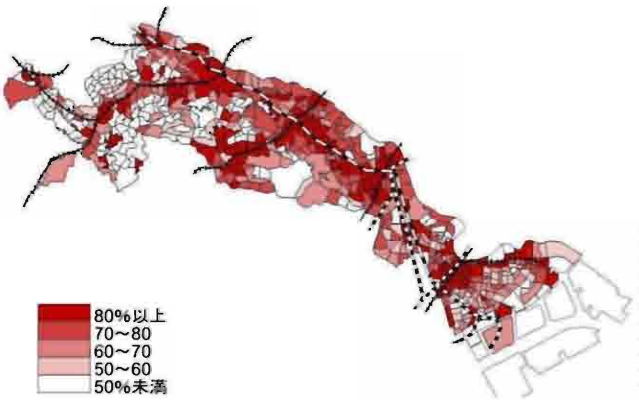

図 2-2 町丁別共同住宅の割合

宮前区のコミュニティ意識については，川崎市民アンケートで次のような結果が得られている（表 2-1）[文7)]。

表 2-1 川崎市市民アンケート：宮前区抜粋

1 地域の課題	%
①住民同士の関係が薄れている。	25.8
②病院や買い物などの交通が不便	20.7
③住民同士が交流する場や機会の不足	18.3
④高齢者を地域で支える仕組みが不十分	16.4
2 地域の課題解決に有効な取り組み	
①行政からの支援	30.1
②地域住民と行政との協力・連携	24.9
③地域住民の意識の向上	23.0
④住民同士の交流の活性化	19.7
3 社会活動・地域活動に継続的に参加しているか	
①はい	13.1
②いいえ	86.9
4 参加しやすい活動範囲	
①住んでいる町内の範囲	43.7
②住まいから徒歩数分以内	40.4
③自転車圏内	11.7
④最寄り駅から数分圏内	11.7
5 どんな行政の支援が必要か	
①活動場所の提供	35.2
②活動費の助成	34.7
③情報提供の充実	31.9
④人材育成・確保	25.8

本実践活動は，川崎市宮前区，田園都市線の宮崎台駅から徒歩 2 分の「宮崎台おちば公園」で実施した。宮前区が，郊外住宅地としてコミュニティ形成のむずかしさを内包し，なおかつ住民同士の関係の希薄さを不安に感じている人が多い地域だからである。とりわけ，居住歴の短い，集合住宅居住者が集積している鉄道沿線周辺はその傾向が顕著である。そこで，鉄道沿線周辺の住民を対象とするため，駅に近い公園を選択した。

2.2 活動主体と活動の経緯について

2.2.1 コミュニティプラットフォーム企図までの経緯

このような背景を抱える宮前区で，2012 年に本実践活動の主体である「宮前まち倶楽部」は発足し，目的を「宮前区をベッドタウンから，人々の故郷であるホームタウンに変えるための「仕組づくり」や「場作り」を行うこと」，活動の三本柱を「地域資源（人，場所，団体等）の発掘」「資源の可視化」「参加のデザイン」とした。(HP：http://machi-club.net/)

地域資源発掘には，地域の各種イベントや活動に足を運ぶ活動を主に，ホームページ上に 2014 年から，区内のイベントを一元的に集めた「みやまえじもとイベントカレンダー」を開設し，情報を収集した。さらに，2015 年には，「『みやまえ人』発掘ワークショップ」を開催し，各種市民団体のメンバー数十名にそれぞれが推薦する「宮前区の一押し人」を挙げてもらい，区内の人的資源を網羅的に把握した。

その後，『みやまえ人』の活動現場に足を運ぶことで，多くの団体が，「場，資金，人材」や「情報の発信及び入

手方法」の不足に悩み，活動の発展や継続性が危ぶまれる原因になっていることに危機感を抱いていた。

そこで，様々な主体が一堂に会するプラットフォームを準備することで，個々の地域資源（活動団体）が自然に繋がり，連携し協働していく「創発的」[注1]な動きが生まれるのではないかと想定した。プラットフォームの具体的な活動の「場」としては，「場や資金，人材の確保」さらには「行政や他セクターとの連携」につながり，また普段地域の活動に参加していない住民に活動が可視化され，活動に参加してもらえるような仕組みとして，今回の実践活動となる「公園を使ったまちかどマルシェ」を計画した。

可視化には，多くの人が自由に出入りする公共の空間が最適である。普段何げなく足を運ぶ，たまたま目にする，日常生活のなかに存在する公共空間が公園である。公園は，どこにでもある公共空間で，ほとんどの人の徒歩圏内にある。また，大きなオープンスペースである公園であれば，区内の様々な「地域資源」が共に出展・出店して,楽しい場をつくることができ,近隣住民が集い，新しい繋がりや関心も生まれるのではないか。また，そうした市民発の取組には，行政を含む他のセクターも関心を寄せるのではないか，と考えた。

2.2.2 コミュニティプラットフォーム設立の経緯

市民活動団体のなかから，子育て世代ママ，小中学生，シニア世代，商店会，祭りを対象に活動しているグループに声をかけ，彼らをオリジナルメンバーとして，「miyamae ぷらっと」（宮前コミュニティプラットフォーム）が 2016 年 12 月に発足した。

3. 実践活動の内容

3.1 「まちかどマルシェ」の独創性

「マルシェ」という言葉から一般的に連想されるのは，個人や商店が野菜やクラフトを販売する市（いち）やマーケットであるが，「まちかどマルシェ」は，モノの売買にとどまらない意味を持ち，以下のように定義される。

【まちかど】まちなかにあるいろいろな「公共の空間」。あらゆる年齢層の人が徒歩や自転車で気軽に出かけられる距離にあり，誰でも自由に立ち入ることのできる，まちの拠点になり得る場所。

【マルシェ】住民がいろいろな形で参加している「場」であること。「まちデビュー」「手仕事等販売」「出番作り」「居場所づくり」「知り合い作り」「課題解決」「地元学」など，様々な機能を持ち，多様な課題も解決できる場として，多彩な要素を組み込んで実施される。

上記定義に基づいて，「まちかどマルシェ」には以下の 3 要素を含む：

【シェアの要素】絵本の読み聞かせや自由に好きな本が読める「まちかどライブラリー」，コーヒーやパンの試飲試食ができる「まちかどカフェ」，市民団体や行政が発行している各種リーフレットやパンフレットなどの配布を含む「まち紹介」，介護。相続・子育て・教育など多様なテーマの活動団体が参加する。

【マーケットの要素】シニアや子育て中のママを含む多様な住民の持つ様々なスキルを紹介し，商品の販売や制作ワークショップを実施。地場の朝採り野菜の販売。

【基金の要素】まちかどマルシェへの参加費は無料だが，販売活動等により利益を得た場合は，収益の一部（割合は自由）を「まちかど基金」に寄付。それを資金にマルシェを実施し，余剰が出れば，他の活動団体に寄付して活動を応援，まち全体の活性化に寄与する。出店・出展者には，そうした仕組みであることに賛同してもらう。

3.2「まちかどマルシェ」の内容

3.2.1「まちかどマルシェ」の開催日程・場所

本実践研究期間に公園で 3 回，公園との比較研究のために区内の田園都市線鷺沼駅の駅前広場のなかの店舗前で 4 回，まちかどマルシェを開催した。特別編として「まちかどライブラリー」を宮前市民館で開催した（表 3-1）。

表 3-1 まちかどマルシェ日程・場所・準備

開催日				
おちば公園	2017年10月11日	2018年5月16日	2018年10月10日	
鷺沼駅前	2017年9月15日	2017年12月16日	2018年6月14日	2018年9月14日
宮前市民館	2018年3月4日			

主要開催場所	
おちば公園	街区公園、面積：1034㎡、田園都市線宮崎台駅徒歩2分
鷺沼駅前	田園都市線鷺沼駅前広場内「東急電鉄住まいと暮らしのコンシェルジュ」店舗前デッキ（幅8メートルx奥行2.5メートル）＋2階会議室

事前準備＋広報活動	
打ち合わせ	開催日1か月前に全参加者で打ち合わせ、開催後の反省会
チラシ制作	担当：ママオン（開催1か月前の打ち合わせで内容確認制作）
広報活動	開催日1週間前に、開催場所駅前及びその周辺でチラシ配布（300枚）
	宮崎台＋鷺沼駅構内の宮前区観光協会のラック（100枚）
	他イベントでの配布・友人知人への配布（200枚）
	近隣店舗での掲示及び配布（50枚）
	参加団体のHP、フェイスブックなどSNS
	miyamaeぷらっとHP（https://miyamaeplatjimdo.com）

3.2.2 コミュニティプラットフォームのメンバー

「miyamae ぷらっと」のオリジナルメンバーは「宮前まち倶楽部」が呼び掛けた。その後マルシェごとに参加団体は変化し，新たな団体の参加依頼や紹介によって，新メンバーが加わり総数は増加した。以下は本実践活動期間中に開催した「まちかどマルシェ」の参加団体（●印

は初期メンバー）である（表 3-2，図 3-1）。

表 3-2　マルシェの参加団体

団体名	活動内容	鷺沼駅前	おちば公園	鷺沼駅前	宮前市民館広場	おちば公園	鷺沼駅前	鷺沼駅前	おちば公園
		2017 9月	2017 10月	2017 12月	2018 3月	2018 5月	2018 6月	2018 9月	2018 10月
参加団体数		10	7	10	9	8	9	9	10
ママオン	手作り作家ママネットワーク	●	○	○		○	○		○
じもたんキッズ	地元小学生新聞制作	●	○	○	○	○	○	○	○
さくら坂スタジオ	さくら祭り運営	●	○	○		○			○
宮前まち倶楽部	地域連携	●	○	○	○	○	○	○	○
Natural Art	まちゼミ・商店会活動	●	○	○		○	○	○	
こがも会	相続介護シニア支援	●	○	○	○	○	○	○	○
農あるまち委員会	区内の農家を応援る	○		○	○		○	○	
コネクト	帰国子女ママグループ		○	○					
ユイット	シニア手作りサークル	○				○			○
Miyamae Small Business Network	手作り作家ネットワーク					○	○	○	
サンフェスタ	子育てママ応援							○	
小泉農園	農家＋農園フェス開催	○		○	○		○	○	
はぐるま農園	都市型福祉農園	○		○	○		○	○	
グリーンバード	清掃活動								○
ムラセさん歩の会	早朝散歩ネットワーク								○
びーんずネット	子育て支援								○
畑はじめ	農家＋新住民による畑								○
花の停留所	花農家＋マルシェ開催				○				
ささら プロダクション	映像と書籍で地域史を残す				○				
宮前市民館	区役所生涯学習支援課				○				
花の台町内会	町内会								協力
東京急行電鉄	民間企業	後援		後援			後援	後援	
宮前区観光協会	任意団体	後援	後援	後援		後援	後援	後援	後援
鷺沼商店会	商店会	後援		後援			後援		

図 3-1 コミュニティプラットフォームのイメージ図

3.3 まちかどマルシェの内容

以下に全８回の要点と成果をまとめる（表 3-3～3-10）。なお，公園との比較のために実施した駅前広場及び市民館でのマルシェも含めて時系列に記述するが，本実践研究の対象である公園での開催回については，本文に詳しくその様子を記述する。

表 3-3 まちかどマルシェ１回目の要点（写真 3-1）

開催日	2017年9月15日 快晴
開催場所	鷺沼駅前広場店舗前デッキ
開催時間	10時～16時
出展団体	10団体延べ15名
内容	地場野菜販売、手作り作品販売、手作り品制作ワークショップ、ねこ足昆布だし販売、エンディングノートの書き方ワークショップ、
売上	89,174円（この中から基金に一部拠出） 野菜売上：24,419円（全額まちかど基金に）
当日の様子	鷺沼駅前の改札そばという立地は、多くの人が目的地に向かって急ぎ足で通り過ぎていく。なかなか足を止めてくれない。 地場野菜：シーズンのみやまえ梨をはじめ、多種揃ったこともあり、10時の開始後から、あっという間に売り切れた。みやまえ梨というブランド品も、宮前区に農家があることにも、驚く人が多い。 マルシェの出現に「どういうグループ？」「どこの業者さん？」などと何度も質問され、その度に趣旨を説明した。 手作り品を出店したシニアグループとこがも会とのコラボレーション：こがも会発行のエンディングノートに布カバーをつけて販売するという企画。 ダブルケア・子育て中の若いママの中にも、ダブルケアで苦労している人がおり、こがも会の話がどこで聞けるのかわからなかったと。 若いママたちの手作り小物はあまり売れず、がっかりした様子だった。

写真 3-1 鷺沼駅前でのまちかどマルシェ

表 3-4 まちかどマルシェ２回目の要点（図 3-2）

開催日	2017年10月15日（水） 秋晴れ
開催場所	宮崎台おちば公園
開催時間	10時～16時
来場者数	親子150名ほど（アンケート回答数72から推計）
出展団体	7団体延べ20名
出展内容	手作り作品の販売、手作り品制作ワークショップ、カラーセラピー、写真撮影会、ゲーム、まちかどライブラリー、まち案内コーナー、介護相続井戸端会議、じもたんキッズ＋コネクトの制作冊子販売、ねこ足出汁こんぶ販売
売上	75,096円（この中から基金に一部拠出） 野菜販売なし

気候も良く，公園での初開催であり，区内の活動団体メンバー，宮前まちづくり協議会や区民会議メンバー，さらに複数の課の行政職員も見学に訪れ，公園の賑わいに驚いていた。また，地元ニュース誌「タウンニュース」の記者やＦＭ神奈川パーソナリティ（実況中継）が関心をもって足を運んでくれた。手作り作品の販売や制作ワークショップでは，乳幼児連れママが，店舗では子連れでは商品をゆっくり見れないけれど，公園だと安心で嬉しいと，買い手と談笑する様が見られた。また，後日連絡があり，注文や，出店者が自宅で開講している教室やワークショップへの参加にも結びついた。絵本の読み聞かせも人気で，プラットフォームのメンバーが交代で何冊も読み聞かせをした。家が近いからと昼食を挟んで，

①	公園入口に バルーンアート
②	手作り作品販売
③	ハロウィン撮影会 ＋ゲーム
④	砂場でのんびり
⑤	まちのとっておき 情報伝えます
⑥	小学生新聞紹介
⑦	絵本の読み聞かせ
⑧	公園の巨大な シンボルツリー
⑨	午後は小学生も たくさん
⑩	午前は近隣の 保育園児が

図 3-2　マルシェ開催時のおちば公園のなかの様子及び配置図

二回来場した人もいた。総じて穏やかな時間の流れの中で，誰もが安心してゆったりと時間を過ごしていた。開催後の反省会では，売り上げは駅前のほうが多いものの，満足度という面では，公園のほうがはるかに高いという意見が多く出た。

また他地域のマルシェに参加している出店者は，地元で開催する楽しさ（自分の子供が友達を連れてくる，友達のお母さんがくる，いろんな情報交換ができるなど）が満足度の高さにつながっていると話した。自分自身が地元の楽しさを感じていなかったという出店者もいた。

課題は町内会との関係である。公園は町内会が花壇や樹木の剪定，清掃をしている。その場を活用するには町内会に理解を求めることが必要だ。また町内会の掲示板へのチラシ掲示の許可も得たかった。活動にある程度の理解は得られたものの，物品販売という営利活動を伴うものは，町内会の趣旨と合致せず，チラシ掲示はできないと断られた。今後町内会活動への参加等を通じて，粘り強く良い関係を築いていくことが課題となった。

表 3-5 まちかどマルシェ３回目の要点

開催日	2017年12月16日(土)
開催場所	鷺沼駅前広場店舗前デッキ＋二階会議室
開催時間	10時～16時
出展団体	10団体延べ23名
出展内容	地場野菜販売、クリスマスプレゼント用手作り品販売、制作ワークショップ、ねこ足昆布だし販売、クリスマス撮影会
売上	8,616円(この中から基金に一部拠出) 野菜売上：15,795円(全額まちかど基金に)
当日の様子	クリスマス前、初めて週末に開催。人の流れが平日と全く違う。人の流れがようやく出始めたのが11時頃。野菜も昼ごろになって売れ始めた。 都市型福祉農園はぐるま農園のメンバーと共に販売した(写真3-2)。「野菜と福祉」という組み合わせに興味を持った人が、はぐるま農園にその後足を運んでボランティアとして畑作業に参加するということが発生した。 手作り小物コーナーに、孫のためのクリスマスプレゼントを選んでほしいと、かなり長い時間あれこれと出店者と相談しながら、かなりのプレゼントを購入された高齢者がいた(写真3-3)。ゆっくりと相談に乗ってもらいながら買い物ができて嬉しいと、何度も感謝されていた。

写真 3-2　はぐるま農園

写真 3-3　孫へのプレゼント

表 3-6 まちかどマルシェ４回目の要点

開催日	2018年3月4日(水)春一番の強風
開催場所	宮前市民館前広場及び市民館ロビー
開催時間	10時～16時
来場者数	100名程度(アンケート回答者68名から推計)
出展団体	9団体延べ25名
出展内容	区民の選ぶこの一冊フェア
売上	市民館では物品販売禁止
当日の様子	3月に予定していた公園マルシェは、子育て中の家族にとっては慌ただしい春休みで、多くのメンバーの参加が難しくなった。そんな折、1回目、2回目のマルシェに来られた地元農家かつ東急電鉄による田園都市線開発前の地域文化を映像と著書で残す活動をしているささらプロダクション(小倉美恵子代表)から、氏が受賞された川崎市文化賞記念映画上映会を市民館で開催するので、共催で「まちかどマルシェ」を同時開催してほしいとの依頼を受けた。 地域の開発前と後の住民(旧住民と新住民)を繋ぎ、共に活動する様子を市民館という公共空間で人々に見てもらうという意図を持った企画であった。その意図に賛同し、マルシェ開催を快諾した。市民館での物品販売は原則禁止であるため、マルシェの3要素の中の「シェア」の部分を取り出し、「まちかどライブラリー『区民の選ぶこの一冊』フェア」を企画した(写真3-4)。 当日は、小倉氏の友人の多くの地元農家が応援にかけつけ、本の収集から場のデザイン、テントや本の設置まで手伝ってくれ、新たなつながりが生まれ、マルシェへの野菜の提供を申し出てくれた農家もあった。 「区民の選ぶこの一冊フェア」は区内在住者100名ほどに推薦図書を一冊提供してもらい、推薦意図をメモにして、本と共に設置する企画だ。本の提供には小学生からシニアまで幅広い年齢層が参加、宮前区の人々の多様性を本を通じて紹介できた。 本を通じてコミュニティに出ていく機会が生まれたと喜ぶ参加者もいた。 また、新たな連携も生まれた。まちかどマルシェを応援してくれる区の職員が、市役所の「本を使った川崎市のブランド作り」担当に本企画を紹介。当職員が当日市民館に足を運んでくれた上に公園へのマルシェにも他の職員と来場し、「区民の選ぶこの一冊フェア」を書店で開催すること(その後これは来年度の実施が決定した)、また公園での「まちかどライブラリー」を市主催の他イベントに設置することの依頼を受けた。

写真 3-4 まちかどライブラリー

表 3-7 まちかどマルシェ５回目の要点

開催日	2018年5月16日（水） 例年になく暑く日差しが強い
開催場所	宮崎台おちば公園
開催時間	10時～16時
来場者数	60名程度（アンケート回答数21から推計）
出展団体	8団体延べ21名
出展内容	手作り作品の販売、手作り品制作ワークショップ、カラーセラピー、リラクゼーションコーナー、写真撮影会、似顔絵描き、シャボン玉コーナー、まちかどライブラリー、まち案内コーナー、介護相続井戸端会議、じもたんキッズ制作冊子販売、ねこ足出汁こんぶ販売
売上	37,180円（ここからまちかど基金に一部拠出） 野菜販売なし

さわやかな薫風のもとでの開催を想い５月に開催した。新学期準備などで疲れたママのための「癒しマルシェ」とした。しかし例年より５度も気温の高い日差しの強い日となり，午前中は直射日光があたり，人がほとんど来なかった。参加者も木陰を求めて場所を移動するなど，天気に左右される屋外開催の難しさを実感した。しかし人が少ないからこそ，普段よりも時間をかけて，参加者同士でゆっくり話ができた（写真 3-5）。公園という，ルールに縛られないゆるやかな場づくりの意義を実感することができた。

前回のマルシェには若いママたちが溢れ，中を覗いても入ってこなかったシニアの方たちの参加があった。特に公園から徒歩３分の老人福祉センターの常連たちが，マルシェを開催するなら事前に老人福祉センターにもチラシを置きに来てほしいと依頼された（老人福祉センターは公共施設のため，販売を伴うイベントのチラシは置いてもらえないことが後日判明）。同様に，周囲の保育園のグループが複数訪れ，絵本等を自由に読むことのできる機会が公園であるなら，事前に開催日程を知らせてほしいとの依頼も受けた。

また，幼児連れの母親が移動式の小型ライブラリーの前で，自主的に他の子供たちに向けて，自然発生的に大型絵本の読み聞かせを始めていたのも印象的だった（写真 3-6）。この他にも，まちかどライブラリーをじっと眺めておられた高齢の女性が，いったん自宅に戻られた後，「孫に買ったけれどなかなか届けられないうちに日がたってしまった。私の一押し絵本なのでライブラリーに置いてもらえないか」とその本を持参されるということも起こった。本という媒体の人を繋ぐ力，また多様な参加の仕方を促す力を実感した。

写真 3-5 メンバー間でじっくり話を

写真 3-6 自然発生的な絵本の読み聞かせ

表 3-8 まちかどマルシェ６回目の要点

開催日	2018年6月14日（木）
開催場所	鷺沼駅前広場店舗前デッキ＋2階会議室
開催時間	10時～16時
出展団体	10団体延べ23名
出展内容	地場野菜販売、似顔絵描き、手作り作品販売、ハーバリウムワークショップ、木目込み人形展示会、ねこ足昆布だし販売
売上	68,234円（この中から基金に一部拠出） 野菜売上：11,695円（全額まちかど基金に）
当日の様子	今回は手作り作品販売のグループが、これまでとは別の団体になった。幼児連れのお母さんたちの販売グループで、店舗二階の小会議室を保育のために利用することに店長に快諾いただいた。出店者は順番に保育室で子どもを遊ばせて、周囲に迷惑がかからないようにして出店。高い保育料を払わないとなかなか地域に出番を持てないお母さんたちが、今回の参加をとても喜んでくれた。また、小さな乳幼児を抱いたお母さんがゆっくりと商品を見ている姿も同様の思いを抱かせた（写真3-7）。連携しあうことで閉塞的な子育てを少しは変えることができるそうだ。 この回では、他地域でマルシェを実施している主催者の見学があり、区内には他にもマルシェのようなイベントを実施している団体がいくつかあるので、情報交換の場として「マルシェサミット」を企画しないかという話が出た。その後、10月26日にマルシェサミットは実現し、より大きくゆるやかなコミュニティプラットフォーム誕生の機運が高まってきている。

写真 3-7 育児真っ只中のママさんたち

表 3-9 まちかどマルシェ７回目の要点

開催日	2018年9月14日(金)
開催場所	鷺沼駅前広場店舗前デッキ＋2階会議室
開催時間	10時～16時
出展団体	10団体延べ23名
出展内容	地場野菜販売、エンディングノート書き方ワークショップ、似顔絵描き、手作り作品販売、手作り品ワークショップ、アロマヒーリング、映画上映会(アンケート実施)、ねこ足昆布だし販売
売上	118,984円(この中から基金に一部拠出) 野菜売上 11,200円(全額まちかど基金に)
当日の様子	初めて映画上映会を実施し(写真3-8)、観客動員数は38名と少なかったものの、映画好きという新たな層との関係性が築けた。 また午前中開催されたエンディングノートの書き方ワークショップ、区内で25年以上高齢者介護サポートをしているボランティアグループの代表が参加、連携の申し出あった。

写真 3-8　店舗入り口に映画上映会のポスター

表 3-10 まちかどマルシェ８回目の要点

開催日	2018年10月10日(水)快晴
開催場所	宮崎台おちば公園
開催時間	10時～17時
	(午前7～10時他団体による朝企画)
来場者数	350名程度(子供へのアンパンマンティッシュ配布数176より推計)
出展団体	8団体延べ21名
出展内容	手作り作品の販売、手作り品制作ワークショップ、カラーセラピー、リラクゼーションコーナー、写真撮影会、まちかどライブラリー、まち案内コーナー、介護相続井戸端会議、まちかどカフェ(試飲試食)、じもたんキッズー押し文具販売、じもたんキッズ制作冊子販売
売上	104,600円(ここからまちかど基金に一部拠出) 野菜販売なし

おちば公園での開催も３回目になり，町内会の掲示板へのチラシ掲載の許可が出た。町会の様々な催しに参加し，賛同者を増やすよう心掛けた。7 月には町会の広報担当委員の英断もあり，町内会広報誌にまちかどマルシェの様子が掲載された。９月１日には町内会長をはじめとした町内会メンバーとの懇談会を開催し，相互協力することの意義をご理解いただいた。掲示板に貼りに歩き，当日は実際に町内会の掲示板を見てきましたという，乳児を抱えたお母さんなど数人に出会った。小地域でのコミュニティ作りにおいて，町内会や自治会などの伝統的な地縁組織と新たな市民活動団体が，公園という共通の基盤で協力しあえる関係性を構築できる可能性が見えた。

また今回のマルシェには近隣のセレサ川崎農業協同組合の店長が来場，店舗前に大きな駐車場があるが埋まらないし，若い人が少ない。町内会に相談したところ，まちかどマルシェを紹介されたと言われた。ターゲットにしたい年齢層のお母さんたちが多くマルシェに可能性を感じられたようで，企画中のマルシェサミットにお誘いしたところ，当日参加された。

また，公園に普段見かけない背広姿の男性数名に気付き声をかけると，近くの信用金庫の職員の方たちだった。その後戻られて，今度は上司を連れて来場。子どもへのアンパンマンティッシュを 500 個寄付してくださった。

さらに，マルシェ前日には，まちかどマルシェを複数回取材しているタウンニュース記者から，区内の聖マリアンナ医科大学病院が昨年度より，病院を地域に開放するオープンホスピタルというイベントを開催しており，タウンニュースに参加市民活動団体の照会があったので，まちかどマルシェを紹介したと連絡が入った。物品の販売はできないので，マルシェ当日にこがも会，じもたんキッズ，宮前まち倶楽部で相談し，一つのブースに３団体で参加することにした（11 月 3 日に実施予定)。

その他にも，市内の耕作放棄地で市が実験的に作っているかぼちゃピューレを使ったパンの試食会を行った。

またもう一つの特筆すべき出来事は，まちかどマルシェ開催日の早朝に，他の団体によって新たな取組が行われたことだ。隔週で早朝散歩と清掃をしているグループで，自分たちも公園を活用して地域の人に働きかけたいと，マルシェの朝企画として，公園清掃と朝カフェ，さらにその団体の子育てカウンセラーによる子育て青空勉強会も開催された。当日は小さな朝カフェが登場，清々しい空気のなか，気持ちのいいマルシェがスタートした。

公園はどこにでもある空間だが，それが本当に活用されているかどうかは疑わしい。まちかどマルシェを開催しているおちば公園も，平日の午後 3 時以降は，幼稚園児を連れてママグループが立ち寄り賑やかになるものの，午前中は静けさに満ちている（写真 3-9)。

写真 3-9 開催日前日と開催日の公園の様子

4. 実践活動から得られた成果と評価

本活動を通じて，当初６団体だったプラットフォームのメンバー（団体）数は 26 に増え，メンバー間，また他セクターからの働きかけによって，新たなつながりや連携，マルシェ以外の場での活動や事業の機会等が，数多く提供された。この動きはまた，多くの情報提供の機会を得て発信された（表 4-1）。

表 4-1 活動から得られた成果一覧

まちかどマルシェへの参加団体数		
①	当初6団体⇒26団体（協力、協賛含む）（2018年10月末日）	
マルシェ参加団体間の新たな連携		
②	オープンホスピタルにメンバー団体が合同で参加（2018年11月3日）	
③	メンバーの販売する冊子に他メンバーがカバーを制作販売へ	
④	複数メンバーで他マルシェに参加	
⑤	メンバーによる他公園でのマルシェ開催（2018年10月、11月、12月）	
⑥	メンバー団体の開催するセミナーに他メンバーが参加	
⑦	マルシェサミットの開催（2018年10月26日）	
他主体・セクターとのつながり、連携		
⑧	住民	マルシェで子どもたちに主体的に読み聞かせを行う住民の登場
⑨	住民	マルシェへの出展希望の問い合わせ
⑩	住民	マルシェへの本の寄付
⑪	住民	マルシェ後にメンバー団体への連絡や購入・制作依頼
⑫	行政	まちかどライブラリーの市民館での開催依頼
⑬	行政	公園へのライブラリー常設設置に向けた企画発足
⑭	行政	まちかどライブラリーの全市版を実施（2019年3月予定）
⑮	行政	市が開催するイベントへの参加協力依頼
⑯	行政	小学校の夏祭りでのマルシェ出展依頼
⑰	行政	区制作の各種チラシをマルシェで配布
⑱	行政	宮前観光協会から広報誌記事執筆依頼
⑲	地域団体	町内会のチラシをマルシェで配布
⑳	地域団体	高齢者支援ボランティア団体からの連携依頼
㉑	地域団体	老人会からの講演依頼
㉒	地域団体	マルシェ当日、他団体による朝企画実施（2018年10月10日）
㉓	農家	農家から農作物の寄付
㉔	農家	農家からのマルシェでの農作物試食依頼
㉕	民間	農協からのマルシェ開催場所提供申し出（農協駐車場）
㉖	民間	近隣信用金庫からの協力申し出
㉗	民間	区内病院からのオープンホスピタル出展依頼
情報発信		
㉘	地元紙「タウンニュース」への掲載複数回	
㉙	町内会広報誌にまちかどマルシェの記事掲載（2018年7月号）	
㉚	まちづくり協議会の広報誌への掲載（2018年9月号）	
㉛	市長との車座集会での発表（2018年11月18日予定）	
㉜	東大全学ゼミ（奥村裕一教授）で事例報告（2018年10月26日）	
㉝	全国マイクロライブラリーサミットでの事例発表（2018年5月13日）	
㉞	「宮前メッセ」でまちかどマルシェの紹介（2018年3月10日）	
㉟	宮前農フォーラムで発表（2018年3月11日）	
㊱	横浜FM放送による実況中継（2017年10月11日）	

以上，新たに起こった，または得られた機会（①～㊱）によって，「地域コミュニティ活動の活性化」の課題とされている，「担い手」「活動場所」「資金」「情報発信」「つながり」の不足がどれほど補われたかを，本活動の効果として検証した（表 4-2）（例：成果②「オープンホスピタルにメンバー団体が合同で参加」⇒病院という「活動場所」，新たな対象に向けての「情報発信機会」，複数の団体の合同参加による「つながり」を得られたと評価）。

表 4-2 地域活動活性化への効果

効果	成果番号	件数
マルシェ以外の、新たな活動場所が提供されたケース	②④⑤⑫⑬⑮⑯⑳㉑㉕㉗	11件
マルシェ以外の場での、販売等の場を得て、資金確保の機会を得たケース	④⑤⑪㉑㉕	5件
住民の新たな参加の可能性が見えたケース	⑧⑨⑩	3件
情報発信の機会が得られたケース	②④⑤⑦⑫⑬⑭⑯㉕㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟	18件
参加団体間や他セクターとのつながり、連携、協働事業が新たに生まれたケース	①②③④⑤⑥⑦⑩⑪⑫⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉒㉓㉔㉕㉖㉗	22件

上記より，地域活動の活性化を促すさまざまな効果が得られたことが確認できた。特に，「情報発信」「新たな繋がりや連携，協働事業」の機会が数多く提供された。異なるテーマやセクター間が連携することで，個々の主体個別の活動からは得られなかった，新たな視点や新規の課題解決手法により，これまで以上に多様で包摂的な地域活動が展開される可能性が見いだせた。

「住民の新たな参加」が一足飛びには進まないことは当初より予想されたが，他の公園や場所でのマルシェ開催という水平展開もすでに始まっていること，今後も身近な場所でマルシェが開催されていくこと，また，新たな担い手の確保には不可欠な「楽しさ」がこの活動から発信されていることから，人々の参加の意識が次第に醸成されていくことが期待される。

5. 実践活動を通じて得られた学び

5.1 コミュニティプラットフォームの可能性と課題

個々の市民活動団体の活動の活性化には，地域のなかで信頼を得ていくことが不可欠であるが，それには地道な努力と年月が必要である。しかしコミュニティプラットフォームという形態は，多様な主体の複合体であることで，私益ではなく公益的な活動として容易に認知され，プラットフォームも，メンバー団体も，行政や民間企業，さらに町内会や住民からの「信頼」を得て，多様な活動機会を得やすくなることがわかった。公園，駅前広場，市民館広場の利用許可を得られたのも，プラットフォームだったからである。

本実践活動では，以前からの地域活動を通じて信頼できる個人や団体を特定できていたため，そうした人達に参加を呼び掛けたが，マルシェの回を重ねるごとに，プラットフォームに入りたい人や団体から，多数の問い合わせを受けた。また反対に，既得権を守ろうと，新たな人の参加を拒むケースも発生した。プラットフォームというコミュニティ基盤が有効であると認知されればされるほど，どのような組織運営形態をとっていくことが良いのか，今後の大きな課題である。

5.2 公園という公共空間

今回活動場所として，誰もがアクセスできる屋外の公共空間である公園や駅前を選んだのは，プラットフォームメンバーの活動の可視化を最大の目的としたからで，それはある程度の効果を得た。それに加え，公園では人々の滞留時間が長く，訪れる住民と参加メンバーとの自然発生的な，何気ない会話が数多く生まれ，そこから住民の抱えるさまざまな課題やニーズもまた，共有され，可視化できることがわかった。

特に，今回あまり効果が得られなかった「住民の新たな担い手としての活動への参加」という部分では，活動に関心がまったくないのではなく，関心があっても参加の方法がわからない，また見知らぬ人々の輪のなかに一人で入っていく勇気がないなどの課題が浮かび上がった。住民へのより効果的なアプローチの方法や情報発信に変えることで、担い手不足という課題を解決する糸口も見えてきそうである。そうした意味でも，住民が身近な公園で市民活動に気軽に出会える，マルシェのような場があることの意義は大きい。

6. 結び：今後の課題

本実践活動を通じて，公園が住民の新たな関係性を構築し，課題を解決していくハブとなっていく可能性を有していることが十分に認められた。またコミュニティプラットフォームという基盤の意義も確認された。まちづくりに参加しようという市民による，地域貢献活動の重なりが，社会的包摂的の高いコミュニティを作っていく。今回はまちかどマルシェを開催することに注力し，十分なインタビューやアンケート調査を実施できなかった。今後の課題である。類似の全国や海外の事例との比較研究も行い，住民主体のコミュニティプラットフォームの在り方に関する方法論の確立を目指して，今後も活動と研究を続けていきたい。

＜謝辞＞

本実践においてはmiyamaeぷらっと及び宮前まち倶楽部のメンバーには多大なご協力をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

＜注＞

1) 創発（emergence）とは，複雑系の理論において用いられる用語で，生物学，物理学，システム工学，経営学，組織論など，様々な分野で研究されており，「構成要素の性質の単純な総和にとどまらない性質（成果）が，個別要素の局所的な相互作用によって現れ，局所的な複数の相互作用が複雑に組織化することで，個別の要素の振る舞いからは予測できないようなシステムが構成される」ことを指す。

＜参考文献＞

1) 川崎市，川崎市の人口（1）平成27年国勢調査結果報告書（人口等基本集計結果），川崎市，2016
2) 平成19年度版国民生活白書，内閣府，P91－93，2007
3) 国領二郎，プラットフォームと企業戦略：地域社会支える基盤にも，日経新聞やさしい経済学，P.30，2016.11.16朝刊
4) 総務省，新しいコミュニティに関する研究会報告書 http://www.soumu.go.jp/main_content/000036838.pdf 2018.9.10参照
5) 総務省統計局，平成27年国勢調査従業地・通学地による人口・就業状態等集計結果，P19，平成29年6月28日
6) 川崎市，川崎市の人口独自集計編①平成27年国勢調査結果報告書，川崎市，P14，P21，2018
7) 川崎市，平成29年度かわさき市民アンケート報告書

＜活動協力者＞

齋藤陽子　宮前まち倶楽部
入田基之　宮前まち倶楽部